

松山峠7号墳

1997

松山市教育委員会
松山市生涯学習振興財團
埋蔵文化財センター

桧山峠7号墳

1997

松山市教育委員会
松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター



北方より望む桧山峠古墳群



墳丘と竪穴式石室（南より）



墳丘盛土の状況（トレンチ3・北西より）



墳丘盛土の状況（トレンチ4・北東より）



石室遺物出土状況（南より）



石室出土の主な遺物

序

この報告書は、松山市教育委員会文化教育課と財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが平成6年度から7年度にかけて行った「松山城7号墳」の発掘調査報告書です。古墳からの眺望はすばらしく、瀬戸内に面した道後平野の様子が手にとるようになります。

この古墳周辺の丘陵には数多くの古墳が築かれていますが、発掘調査が行われた例は少なく、また、本古墳のような從来よく知られていなかった5世紀代の占墳の埋葬施設をあきらかにできたことは大きな成果といえるでしょう。このような成果をあげることができましたのも、ご協力をいただきました四国電力株式会社をはじめ、調査関係各位のご理解のたまものと感謝しております。

本告が、多方面で活用され、埋蔵文化財の保護・継承の一助となりますことを心より願っております。

平成9年9月1日

財団法人 松山市生涯学習振興財團

理事長 田中 誠一

例　　言

1. 本書は、松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが平成7年2月から6月の間に松山市平井町乙9-2、32-2において実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 遺構の実測は、大森一成、宮脇和人が担当し、製図は大森、岡崎政信が行った。
3. 使用した方位は磁北である。
4. 遺物の実測・製図は栗田茂敏、丹生谷道代、新出寿美子が行い、表作成には加島なおみの協力を得た。
5. 遺物の縮尺は、土器を1/3に、鉄器1/2に、また玉類を1/1に統一している。石製品については、その法量に応じて1/2、1/1の縮尺を使い分けた。
6. 遺構の撮影は大西朋子、栗田茂敏が行い、遺物撮影は大西朋子が担当した。
7. 調査に際しては、愛媛大学下條信行・村上恭通の両先生の貴重なご指導、ご教示をいただいた。また、広島県立歴史博物館福井照道氏には鉄器のX線撮影にあたって、多大なご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。
8. 本書にかかるる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターに収蔵、保管されている。
9. 本書の執筆・編集は栗田茂敏が行った。

本文目次

I 調査に至る経緯と組織	1
II 環 境	2
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	2
III 造構と遺物	7
1. 墳 丘	7
2. 主体部	17
3. その他の遺物	23
IV ま と め	26
1. 古墳の年代	26
2. 道後平野における同年代の古墳との比較	26
3. 成果と課題	28

図 目 次

図1 調査地周辺の主要古墳分布	3
図2 松山峠古墳群内の古墳分布	4
図3 調査前墳丘測量図	7
図4 主体部墳丘の搅乱状況	8
図5 搅乱坑出土遺物	9
図6 調査地の区割りとトレンチの配置	8
図7 表土撤去後の墳丘	11
図8 墳丘カット部の土層（図6-A～A'）	13
図9 墳丘断ち切り図（図6-B～B'、C～C'）	16
図10 墳丘出土遺物	18
図11 主体部平面・展開図	19
図12 主体部遺物出土状況	20
図13 鉄製品(1)	21
図14 鉄製品(2)	22
図15 刀子柄部装着想定図	22
図16 砥石	22
図17 ガラス小玉	23
図18 石鏡	23
図19 道後平野における5世紀末から6世紀前半代の主要古墳分布	28

表 目 次

表1 主体部撲乱坑出土上器観察表	23
表2 墳丘出土須恵器観察表	23
表3 石室出土鉄錆計測値一覧	25

挿図写真目次

写真1 1号墳丘	5
写真2 1号墳横穴式石室	5
写真3 2号墳横穴式石室	5
写真4 4号墳丘	5
写真5 5号墳石材露出状況	5
写真6 6号墳丘	5
写真7 東山9号墳主体部	26
写真8 鶴が峰J区1号墳主体部(1)	27
写真9 鶴が峰J区1号墳主体部(2)	27

図 版 目 次

卷頭図版1 北方より望む松山峠古墳群	
卷頭図版2 墳丘と竪穴式石室（南より）	墳丘盛土の状況（トレンチ3・北西より）
	墳丘盛土の状況（トレンチ4・北東より）
卷頭図版3 石室遺物出土状況（南より）	石室出土の主な遺物

図版1 調査前現景（南東より）	カットされた墳丘の現況（西より）
図版2 墳丘カット面の精査状況(1)（南東より）	墳丘カット面の精査状況(2)（西より）
図版3 主体部上面石材露出状況（北より）	主体部撲乱坑の検出（東より）
図版4 主体部撲乱坑掘削状況（東より）	主体部撲乱坑上師器出土状況（北より）
図版5 墳丘須恵器出土状況(1)	墳丘須恵器出土状況(2)
図版6 竪穴式石室の模様（北東より）	
図版7 石室小口壁部遺物出土状況(1)（南東より）	刀子の出土状況
図版8 石室小口壁部遺物出土状況(2)（南東より）	石室完掘状況(1)（南より）
図版9 後円部墳丘と石室（南西より）	石室完掘状況(3)（北西より）
図版10 石室完掘状況(2)（南東より）	側壁部墓壙断面（南より）
図版11 小口壁部墓壙断面（北東より）	
図版12 完掘された墳丘全景(1)（西より）	

図版13 完掘された墳丘全景(2) (東より)

図版14 墳丘出土遺物(1)

図版15 墳丘出土遺物(2) 石室出土ガラス小玉 石室出土砥石・馬具

図版16 石室出土刀子 刀子X線写真

図版17 石室出土鉄鎌 墳丘採集石鎌

I 調査に至る経緯と組織

四国電力株式会社（以下、四国電力）は松山市東南部域において特別高圧送電線「鷹子支線」新設を計画した。この新設路線のうち、平井町・鷹子町に計画された三箇所の鉄塔用地が、それぞれ「桧山峠古墳群」・「大池古墳群」とされる周知の包蔵地内に所在しており、1994（平成6）年1月、当該地の埋蔵文化財確認調査申請が松山市教育委員会（以下、市教委）に提出された。この確認申請に基づき、同年10月、市教委・（財）松山市生涯学習振興財團 埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）が試掘調査・踏査を行ったところ、これら三箇所のうち平井町の丘陵上の川地内に「桧山峠7号墳」として既に認知されている古墳の存在することがわかった。当該地はその一部が果樹園として利用されていたため、段カット状の整地により墳丘は半截され、土体部である石室石材の一部が表面に露出している状況であった。

この調査結果に基づく市教委・埋文センターと四国電力の三者による協議の結果、この古墳については記録保存対応することとなり、翌1995（平成7）年2月より6月までの間、四国電力の協力のもと以下の組織で調査が実施された。

調査主体 松山市教育委員会 教育長 池田 尚輝

生涯教育部 部長 渡辺 和彦

次長 杉本 博

次長 三好 俊彦

文化教育課 課長 松平 泰定

（財）松山市生涯学習振興財團

理事長 田中 誠一

事務局長 一色 正士

埋蔵文化財センター

所長 河口 雄三

主任幹山内 仁

次長 田所 延行

調査係長 田城 武志

調査主任 栗田 正芳（文化教育課職員）

調査担当 調査員 栗田 茂敏

調査員補 大森 一成

（平成7年4月1日現在）

調査地 松山市平井町乙9-2、32-2

調査面積 282.33m²

調査期間 1995（平成7）年2月22日～6月9日

II 環 境

1. 地理的環境

道後平野は、その北東部を高龜半島の大部分を占める高龜山系の南西面に、また、東から南東部を四国山脈北東麓に限られ、西方の海岸線に向かって扇状に開けた沖積平野である。古墳の立地する丘陵は、このうちの高龜山系の南西面支脈のひとつにあたり、標高166.5mを測る。丘陵からの眺望は、特に南から西方向に優れ、松山平野3大河川のうち重信川、小野川流域の平野から平野西南部の伊予灘に開けた海岸線を一望のもとにすることができる。

2. 歴史的環境

調査地周辺の丘陵は、平野でも最も古墳の密集する地域で、当古墳の属する桧山峠古墳群をはじめとして、芝ヶ崎古墳群、かいなご古墳群、久米大池古墳群など、その総数は数百基にのぼるものと考えられている。当古墳直近にも南東に後するように8号墳、北西200mに9号墳とされる円墳があり、桧山峠と名のつく古墳が12基まで確認されているが、実数はこの数字をかなり凌ぐものと思われ、本調査中の踏査によつても1基の円墳が、調査地と9号墳の間の丘陵稜線上であらたに確認されている。この古墳群中でも最北端に位置する1・2号墳はいずれも直径13m程度の円墳で、小型の横穴式石室が半壟状態で開口している。また、調査地南東170mの5号墳でも破壊された石室石材の一部が露出しており、小規模な横穴式石室を主体部とする小円墳で、おおよそこの古墳群は直径10~15mの円墳で構成される後期を主体とした古墳群であると考えられる。なお、9号墳では五鉢鏡の出土が伝えられているが、詳細は不明である。

ここで周辺の古墳を概観すると、未調査ではあるが、近隣の古墳である程度内容がわかっているものには、平井町にあって5世紀末の帆立貝形首長墳といわれている觀音山古墳や、平野でも最大規模の円墳とされる鷹子町素萬神社古墳などがある。両者ともに形象埴輪を作り、前者には五鉢鏡、後者には單臥文環頭太刀の出土が伝えられている。

以上の首長クラスの未調査古墳のほかに、調査が行われた古墳としては、かいなご古墳群中のかいなご1・2号墳がある。このうち、1号墳は7世紀前半~中頃の複室構造をなす横穴式石室を主体部とする方墳として知られ、また2号墳は6世紀中頃の導入期に近い時期の横穴式石室を主体部として注目される古墳である。そのほか、西方2kmの鷹子町の丘陵上で五郎兵衛谷古墳として6基の古墳が調査されている。いずれも石室全体は壊滅的に破壊されていたが、1号墳では三累環頭太刀の出土が、6号墳では非陶邑系須恵器の出土が報じられている。報告では6世紀末から7世紀初頭とされているが、年代的にはやや遅るものと考えられる。また、東方1.5kmでは、やはり送電線鉄塔関連の調査として平井谷1号墳の調査が行われている。7世紀初頭~中頃の横穴式石室で、数次にわたる埋葬行為に伴う主軸直交の尻床×両の良好な例である。そのほか、芝ヶ崎古墳群中の1号墳は久米80号墳とも呼ばれ、一墳丘に2基の石室が並列して開口しており、6世紀後半代のものと考えられている。

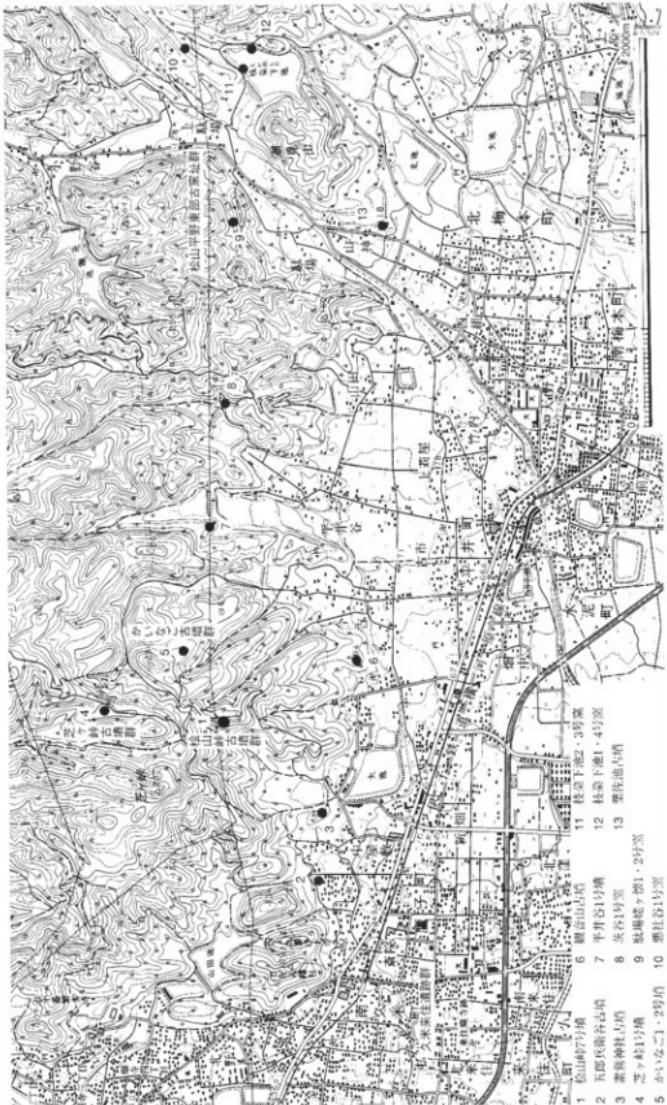


図1 調査地周辺の主要鉱脈分布

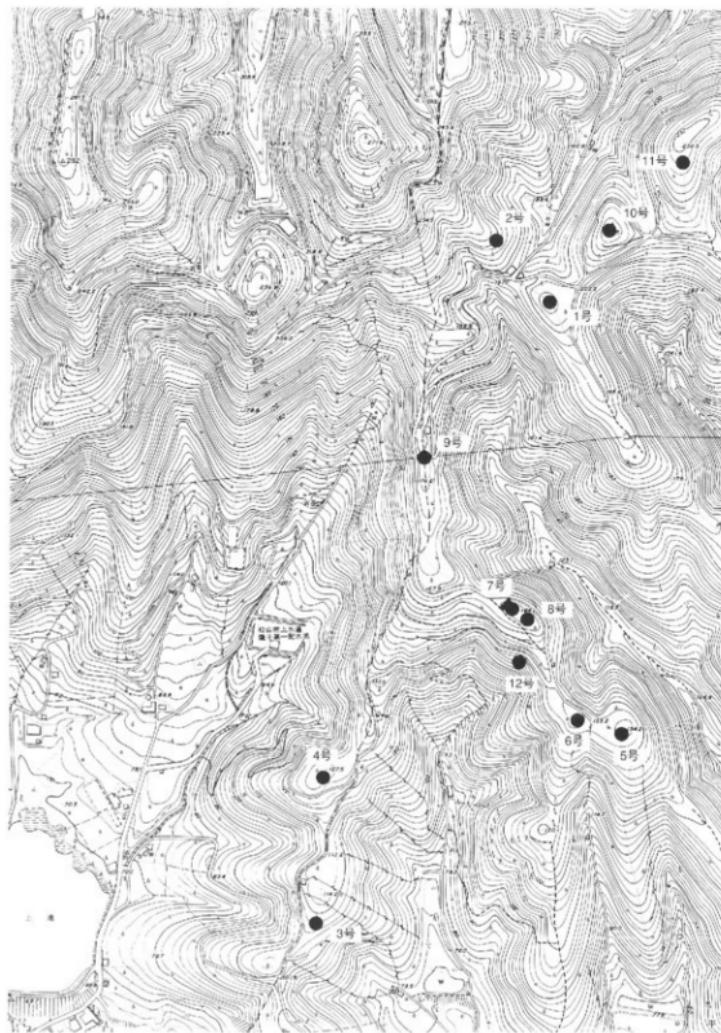


図2 桧山跡古墳群内の古墳分布 (S=1:5,000)

以上の古墳群が見おろす平野の比較的近い位置には、古代豪族久米氏の本拠地である久米・来住の遺跡群が展開している。弥生時代前～中期の集落のほか、6～8世紀の遺構群、とりわけ評・都制にかかる官衙関連遺構や古代寺院址の存在で注目されている遺跡群である。また、当古墳は石手川の支流、小野川水系に属する地域に存在するが、この小野川上流の丘陵範囲には須恵器窯が多く分布しており、松山平野東部古窯址群と呼称されている。調査されたものには7世紀中葉の駄場姥ヶ懃1号窯址がある。このほか、姥ヶ懃・悪社谷・枝栄下・茨谷などの窯址群で6世紀後半から8世紀代の窯の分布が知られている。



写真1 1号墳丘



写真2 1号墳横穴式石室



写真3 2号墳横穴式石室



写真4 4号墳丘



写真5 5号墳石材露出状況



写真6 6号墳丘

〔文献〕

- 『愛媛県内古墳一分布調査報告書』 愛媛県教育委員会 1991
- 相田利美 「4・5世紀伊予の首長墓」『社会科学研究 第1号』 1980
- 森 光晴 「かいなご・松ヶ谷古墳」 松山市教育委員会 1975
- 『五郎兵衛谷古墳』 松山市教育委員会 1978
- 田城武志・高尾和長 「かいなご3号墳・半井谷1号墳」 松山市教育委員会・(財)松山市埋蔵文化財センター 1993
- 常磐 茂 「道後平野北部地域における横穴式石室」『遺跡 第29号』 1986
- 西尾幸則 「駄場施ケ櫓窓址」『松山市史料集 第2巻 考古編Ⅱ』 松山市教育委員会 1987
- 「久米官衙遺跡群」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』 松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター 1991
- 小笠原好彦・森 光晴 「来住庵寺」 松山市教育委員会 1979
- 宮内信一・水本完児 「来住庵寺-第19次調査-」 松山市教育委員会・(財)松山市埋蔵文化財センター 1996
- 松原弘宣 「熱田津と古代伊予国」 劍風社出版 1992
- 梅木謙一編 「来住・久米地区的遺跡」 松山市教育委員会・(財)松山市埋蔵文化財センター 1992
- 「来住・久米地区的遺跡Ⅱ」 松山市教育委員会・(財)松山市埋蔵文化財センター 1994
- 「小野川流域の遺跡」 松山市教育委員会・(財)松山市埋蔵文化財センター 1996

III 遺構と遺物

1. 墳丘

a. 墳丘の現況（図3・4）

前章で述べたように、墳丘は主体部とともに果樹園造成によって半裁されており、そのカットは地表面にまで及んでいる。また、主体部直上には破壊による搅乱坑が窪みとなって痕跡を残しており、石室石材の一部が浮いた状態で散乱していた。なお、この搅乱坑内から土師器小壺が1点出土した。

b. 搅乱坑出土遺物（図5）

土師器

壺（1） 器高9.0cm、口縁部径8.0cm、胴部最大径9.2cmを測る小型の壺で、偏球形の胴部に短い口縁部を持つ。底部は扁平気味の丸底、胴部外面には粗い斜め方向の刷毛目が観察できる。

須恵器

蓋壺（2） 復元口径9.8cm、器高4.9cmを測る身である。受け部は水平に伸び、立ち上がりは若干内傾するが、ほぼ直立に近く立ち上がっている。口端面は内側に傾いた面をなし、段状の窪みが巡っている。底部のヘラ削りは2/3を越える範囲に逆時計方向に施されている。

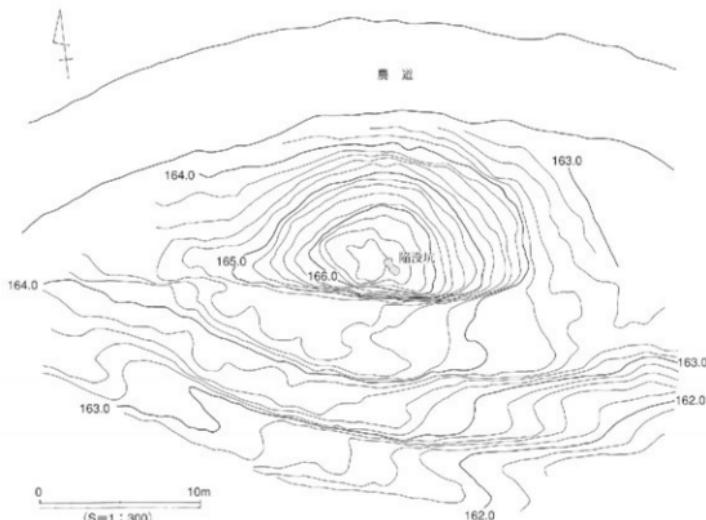


図3 調査前墳丘測量図



図4 主体部壇丘の擾乱状況

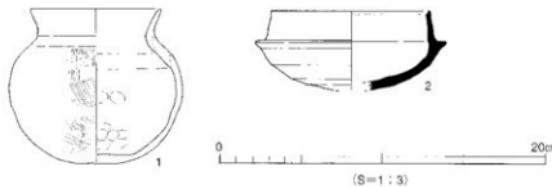


図5 摰乱坑出土遺物

c. 墳形(図7)

遺存の良好な壇丘北東半の墳形や、盛土端の位置、さらに主体部が壇丘の中心に近い位置に存在するすれば、墳形は直径16~17mの円丘に近い形に復元できる。しかし、盛土端のレベル163.6~164.0m付近のセンターを拾っていくと、図に示されるように円形には収束せず、壇丘の北部で外開きに流れていることがわかる。造成による段カットのある南半はもとより、壇丘の北部から西部にかけては既に地山が露出しており、円形に収束するためには、この周辺の地山を最大で1.2m程度はカットして整形する必要がある。したがって、墳形は後に述べる壇丘遺物の出土状況も加味して考えると概ね東西方向を軸とした前方後円形になる可能性が高い。この場合、円丘北西部にみられる164.4mの地山ラインのセンターの屈曲を積極的に評価すると、前方後円形、あるいは帆立貝形の墳形を推定することができるが、調査区の限界や推定前方部の削平のため、前方部端や隅角部などの詳細を把握することはできなかった。

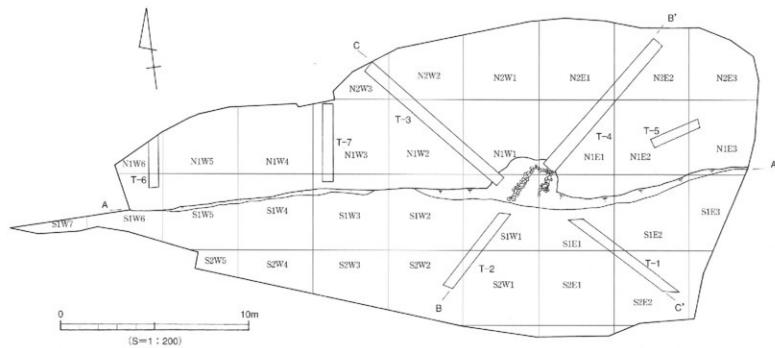


図6 調査地の区割りとトレンチの配置

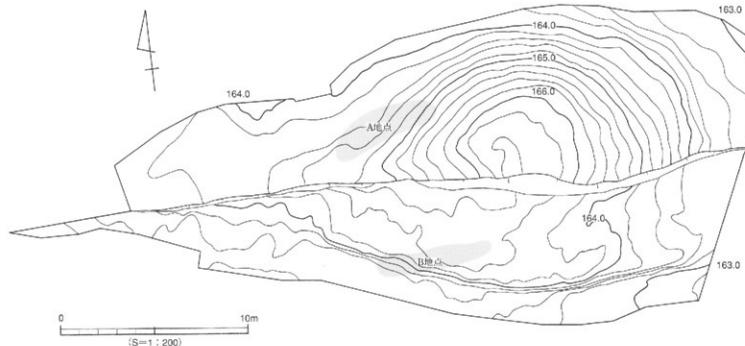


図7 表土撤去後の堆丘

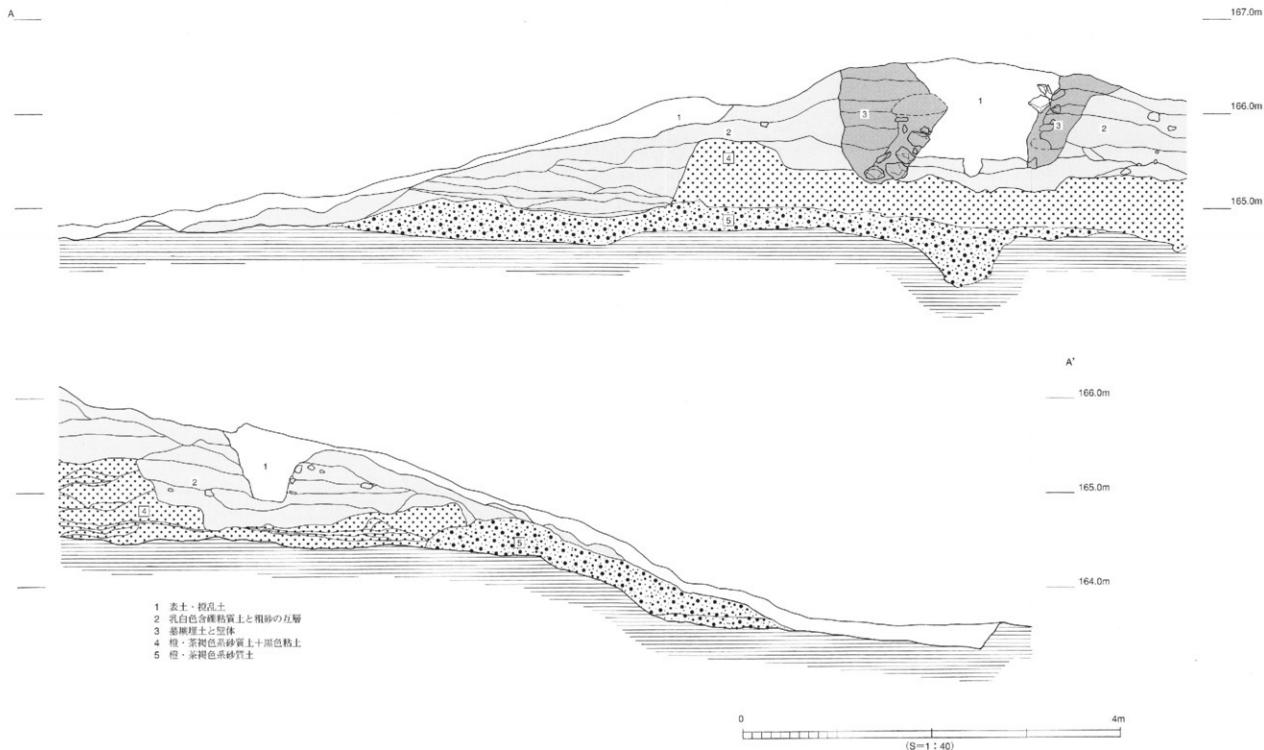


図8 塗丘カット部の土層 (図6-A ~ A')

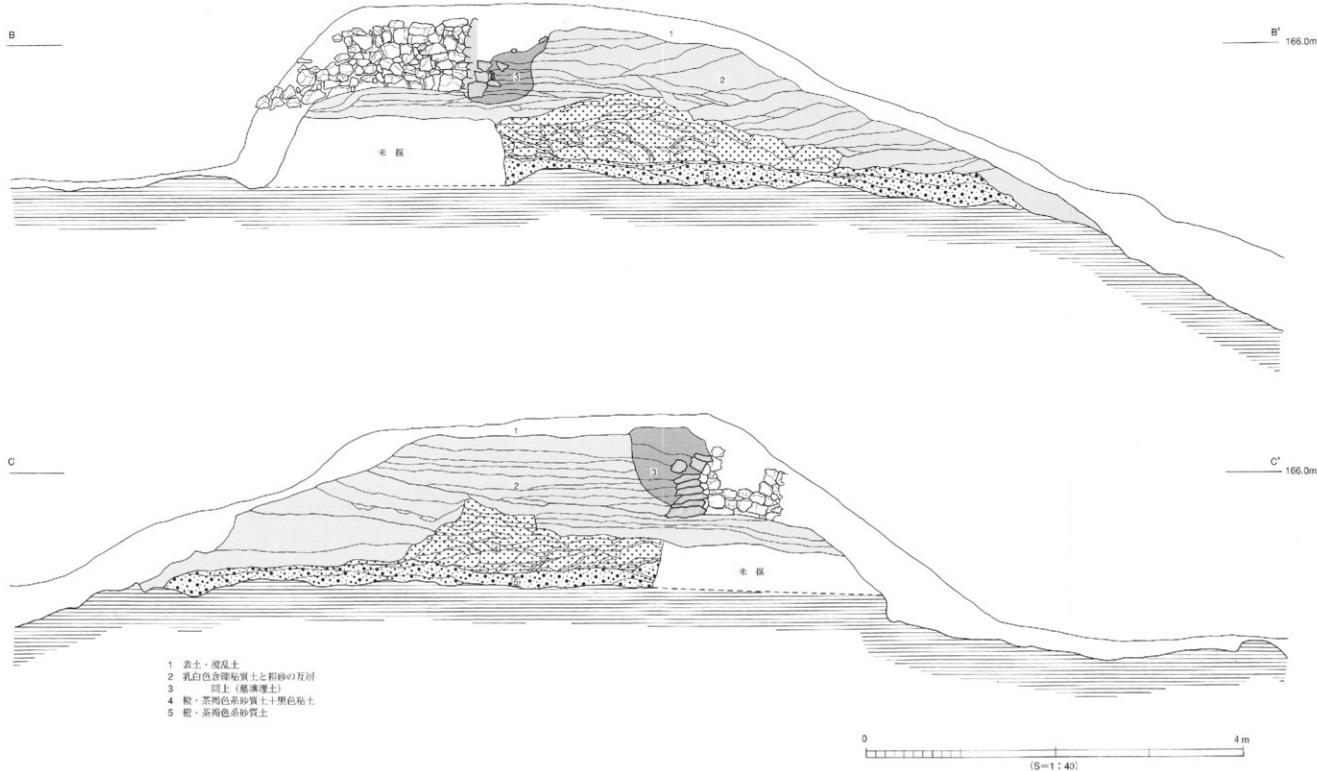


図9 填丘断ち割り図 (図6-B～B', C～C')

d. 構築方法 (図8・9)

後円部と推定される墳丘は、その上部を失っているが、残存する範囲の盛土の状況から観察すると5ないし6段階の工程が復元できる。

まず、最初に地山を概ね平坦に整形する。主体部たる堅穴式石室は、その床面まですべて盛土中に構築されるが、この地山整形の段階で既にその位置・規模・方向は決定されているものと考えられ、石室相当位置に船底形の溝状と目される窪みが掘削される。この窪みについては、部分的な断面観察にとどまり、未掘のため詳細な形状・性格等不明な部分が多いが、この段階で祭祀的な行為が行われた可能性がある。次に、茶褐色系の土を用いて約30cm程度平坦な基盤面を造るが、この際に溝状の窪みも埋められる。この橙褐色土はしまりが悪く吸湿性の高い軟質土である。

第3段階は主に墳丘中心部周縁を造成するが、用いられる土は前段階の土にさらに茶褐色系・黒色系のものが加わる。茶褐色系の上の土質は茶褐色土と同様のものであるが、黒色土は非常に硬く締まった粘質土である。造成は内から外へブロック状の塊を貼り付けるような工法で行われる。この際、特に石室短軸ラインの断面に顕著に観察されるが、墳丘中心部付近を台状に盛り上げようとする意図がみられる。

最終段階になると用いられる土は乳白色の含礫粘質土となり、細かい工程はあるものの一連の工程で仕上げられる。積みは水平基調となり、外側から内側に傾斜した梯級状の内側を比較的細かい単位で水平に積んでいるのが観察できる。なお、それぞれの乳白色土の単位の間には、1cm程度の極めて薄い厚さで粗砂が挟まれている。

主体部は墳丘築成完了後にあらためて掘削された墓壙内に構築され、最終段階の乳白色系の盛土内におさまっている。

e. 遺物の出土状況 (図7)

墳丘の遺物は、主体部上面掘乱坑内で出土した2点を除けば、その多くが主體部北西側・南西側の墳壙の大きく二箇所にまとまって検出された。図7にA地点・B地点と網点で示された部分である。いずれも掘り方を伴わず、露出した地山直上あるいは盛土上面での出土で、須恵器高环を主体とし、すべて破碎された状況での出土で、両地点相互の接合例も1点ある。東西方向主軸の前方後円形を推定した要因のひとつには、これら二箇所の遺物出土位置にあり、くびれ部祭祀にかかわるものと判断した。

f. 出土遺物 (図10)

須恵器

高环（3～7、12・13、15～21） 破片のため、环、高环の判別がつきかねるものがあり、ここでは確実に高环と認定できるものを扱う。3～7は蓋である。口径は概ね12～13cm前後で、器高5cm程度のものである。天井部と口縁部の境に比較的鋭い稜を持つ。天井部の2/3程度を回転ヘラ削りされる。口端部には、斜めに処理され段のような窪みが巡るものと、5のように比較的かっちりした面をなすものがある。

その他は环部、あるいは脚部の片で、復元完形の12は、器高8.0cm、口径10.8cm、脚径8.6cmを測る。短い脚部は3方向に透孔を持つ。直立気味に立ち上がった口縁部は窪みを持って内傾した端面処理を施されている。脚端部はこの個体のように比較的鋭角的なものと、20・21のように丸みを持った

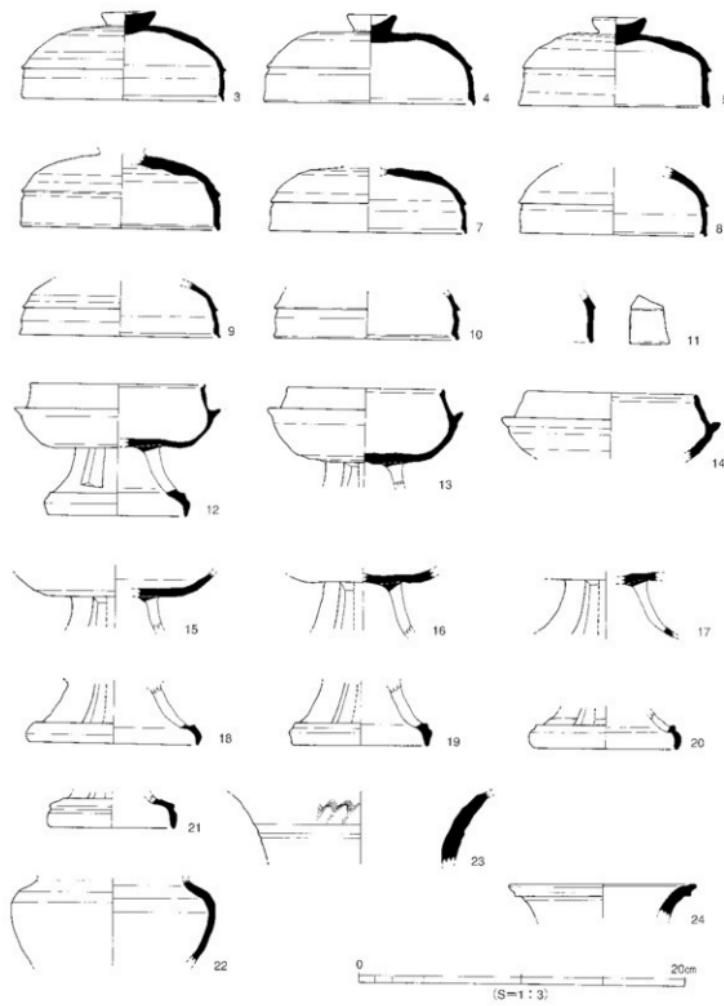


图10 塘丘出土遗物

ものとがある。

坏（8～11、14） 着、身ともに先述の高坏と同様の特徴を持ったものが多いが、身14の口縁部は若干内傾度が強く、端部の処理も甘い。なお、この1点がA・B両地点の破片の接合例である。

短頸壺（22） 胸部の片、最大径12.6cmを測る。胸部最大径と口径にさほど大きな差がないのが特徴である。

広口壺（23・24） 23は頸部の小片で、1条の凹線とその上位に輪描波状文が確認できる。24は小型壺の口縁部片で、他の須恵器と異なり、この1点のみがN 2 E 2区という墳丘東側部の出土である。復元口径11.5cmを測る。尖り気味に丸く仕上げられた口端部直下の外面に断面三角形の鋭角的な突帯が1条巡る。

2. 主体部

a. 構造（図11）

主体部は、長軸をほぼ東西にとする堅穴式石室で、砂岩の塊石小口積みによる構築である。敷地によつて、墳丘とともに斜めに横断するよう半裁されている。また、調査前の段階で墳丘に径0.5m程度の擾乱坑があり、石材の一部が露出していたが、この部分が東小口壁にあたり、軌跡石材が部分的に抜かれていることがわかった。石室は現況で東小口床面幅0.7m、北側壁長2.1m、南側壁長1.0mを測る。高さは、遺存の良好な北壁0.8m程度であるが、石室規模からみてこれ以上さほど高くはならないと考えられる。石材の積みは粗雑で、控え積みもほとんどなく、裏込め土によって強度を保っている。小口および北側壁の最下段には若干大きめの石を用いるが、南側壁には使われていない。現存する範囲では整体に持ち送りはみられない。また、コーナー部分が隅丸形に弧を描くように突き合われるが、しっかりと噛み合はれるような構造ではない。先述のように、墓壙は墳丘完成後に、石室よりもふたまわり程度大きく楕円形状のプランで掘り込まれている。墳底の四周を構状に掘り窪めて基底石を埋め込み、床面部分をやや高めに掘り残す。壁裏込めは墳丘と同質の含砾乳白色粘質土である。床は乳白色粘質土のフラットな面で、特別の施設を持たない。

b. 遺物の配置（図12）

遺物の多くは石室東小口直近の床面上で検出された。出土したものには鉄鎌、馬具（轡）、刀子、砥石がある。また、この部分には赤色顔料が分布している。鉄鎌は北東コーナー部で、刃部を小口側に向かた状態で長軸に平行に10数本の束になって置かれている。鉄鎌の南、石室中軸ラインよりやや北には轡の一部が、さらにその南では刀子が検出されている。砥石は東小口壁に接して置かれている。一方、北側壁直近の、東小口壁から1.5～1.7mの周辺で、ガラス小玉29点が出土したが、この周辺は竹根による擾乱で床面がかなり偏んでおり、出土レベルは不安定である。

c. 出土遺物

鉄製品（図13・14）

鉄鎌（25～43） 圓化に耐え得るものの中のうち、鎌身の形態がわかるものすべてが片逆刺三角形鎌で、25～28のような鎌身が大型のものと、その他の比較的小型のものの2種に分類できる。前者は鎌身部長が2.5cmから2.7cm、逆刺長2.5cmから2.8cmの間に、後者では鎌身部長1.7cmから2cm、逆刺部長

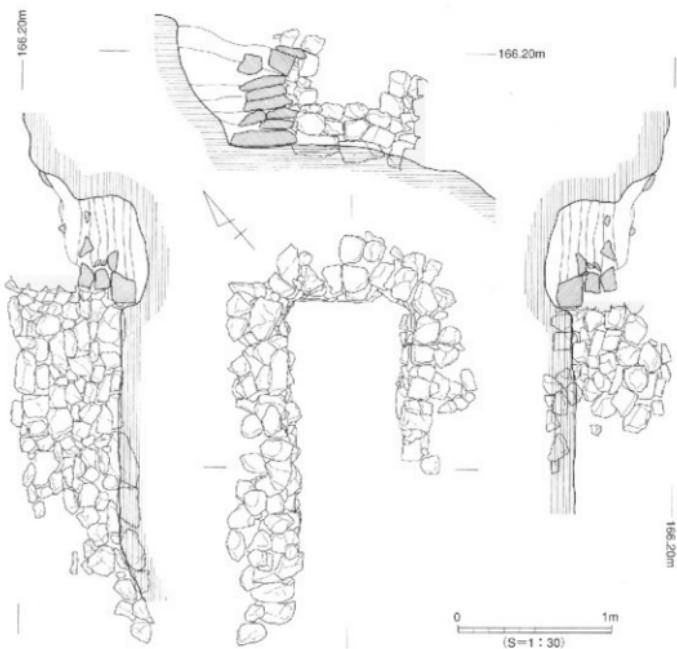


図11 主体部平面・展開図

が2 cmから2.2 cmの間におさまる。また、歛身部の幅は前者で1.5 cm、後者で1 cm程度の値を示すものが多い。完形の25や30で全長、重量（保存処理後の値）を比較すると前者で17 cm・13.3 g、後者で15 cm・9.5 gとなる。いずれの歛身部も片面だけに鎧を持ち、横断面は扁平な二等辺三角形状をなす。鉢被部と茎部の間に闇を持たず、横断面形はどちらの部位も方形である。30・32や40・41で観察されるように、矢柄に装着される前に茎部には横糸状のものを巻き付けられている。

剣（44） 銜と引手の部分が接着した状態で出土した。鍔板は装着されず、引手は遊環を介して銘に連結されている。

刀子（45） 全長13.9 cm、刃部長8.2 cmを測る両刃の刀子で、背部に反りを持つのが形態的な特徴である。また、柄の部材そのものは遺存していないが、柄の装着にも特徴がある。関部と茎端部で茎に接するように両頭の小金具が4点出土している。茎端部の背側の金具は半折して遊離している。縱断

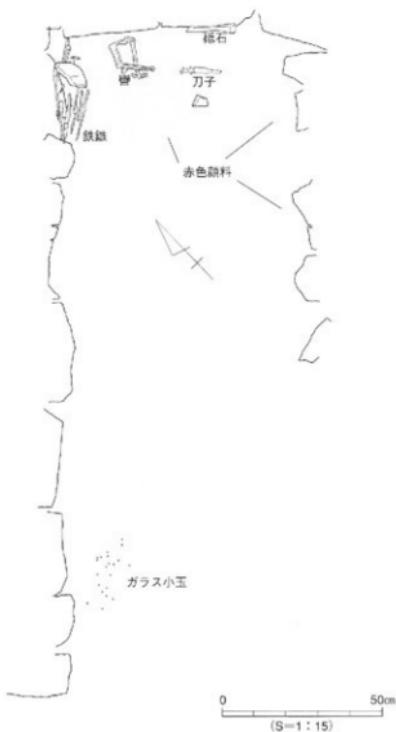


図12 主体部遺物出土状況

で半裁された柄部材で茎を挟み、柄の4箇所の小孔に金具を通して、カシメるように柄を装着していたものと考えられる。

石製品（図16）

砥石（46） 石英粗面岩と思われる石材を利用したもので、長さ15.5cmを測る。本来、横断面2.5×2.5cmの方柱状の石材であったものであるが、各面ともに非常によく使いこまれており、中ほどは1.5cm四方にまで擦り減っている。方柱の4面ともに鉄錫が一面に付着している。

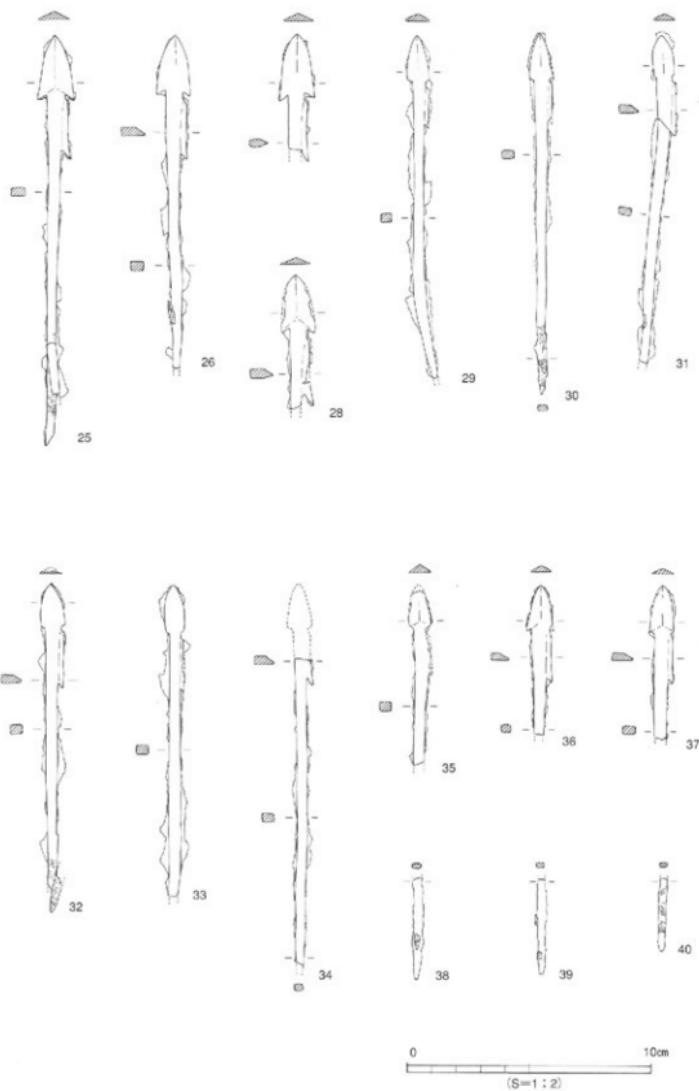


図13 鉄製品 (1)

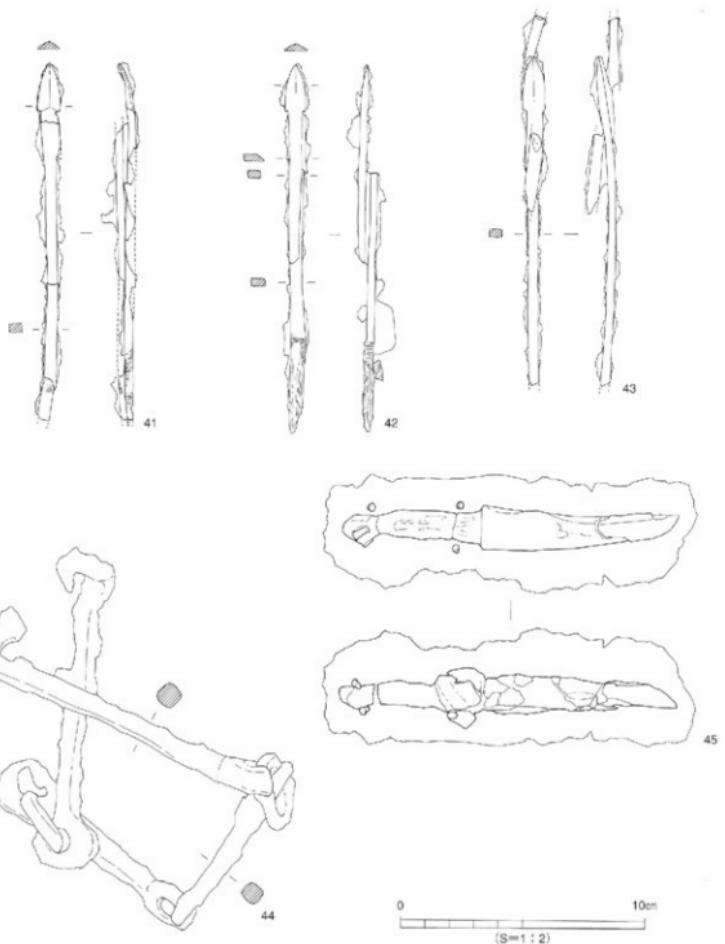


図14 鉄製品 (2)

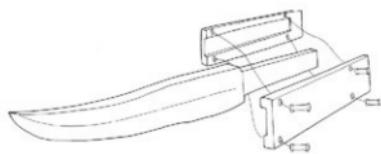


図15 刀子柄部装着想定図

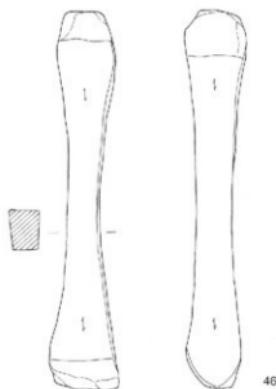
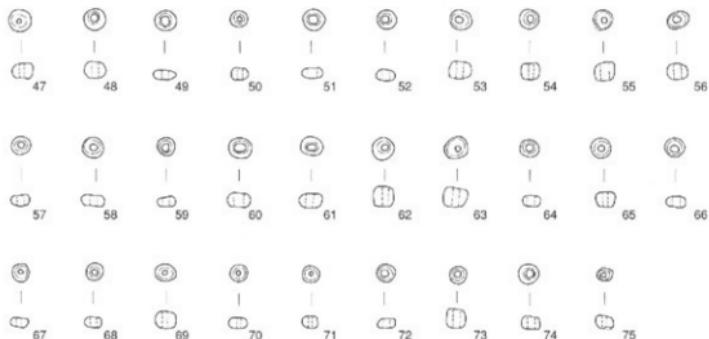


図16 砧石

0 10cm
(S=1:2)



0 2cm
(S=1:1)

図17 ガラス小玉

3. その他の出土遺物

石鏃 (76) 洞爺区南東端で採集された縄文系の石鏃が1点ある。サスカイト製の四基無茎鏃で、長さ・最大幅ともに1.6cmの小型品である。脚部を僅かに欠くが、現況で重量0.6gを量る。

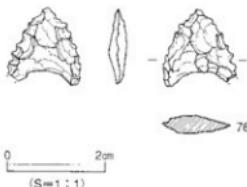


図18 石 鏃

遺物観察表・計測値一覧表

出土遺物のうち、上器類・鐵錐について観察および計測値一覧表を作成した。番号は本文中の通し番号に対応している。なお、観察表の各項目においては、以下のような略記を使用している。

法量欄 () : 推定復元値

調整欄 天ー天井部、つーつまみ、环ー高环环部、底ー底部、环底ー高环底部、脚ー高环脚部、口ー口縁部、体ー体部

胎土欄 細砂粒ー1mm以下の石英・長石、砂粒ー1~2mm程度の石英・長石

表1 主体部攢乱坑出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色 調 整 度	備 考
				外 面	内 面		
1	土器等 水	口 径 (8.0) 基 底 9.0 体 高 10.7	体部中央は頸り、底部を平す。口部は 瘦く、外方を開く。	④ナギ⑦ ⑤ハク目本脚	ナギ	褐 色 細砂粒含む 良 好	口部部大際に 欠損。
2	陶器 灰土	口 径 (9.8) 残 高 4.9	口部部はやや尖出し、内側に凹窓が複数 つつく。受托三角に穴る。底部丸みが 強。	④ヨコナゲ ⑤倒軸ハラケズリ23	ヨコナゲ	灰 色 砂粒少含む 良 好	

表2 塗丘出土須恵器観察表

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色 調 整 度	備 考
				外 面	内 面		
3	土器等 水	口 径 (12.3) 深 底 4.5 つまみ 3.0	口部内面は尖り、外側は斜め。 つまみは上面がわざわざに造り、 つまみは上面がわざわざに造り。	④ヨコナゲ ⑤倒軸ハラケズリ1/2 ⑥ヨロコナゲ	ヨコナゲ	灰 色 砂粒含む	口部は長鋸、 足部の半周鋸。
4	土器等 水	口 径 (13.0) 深 底 5.4 つまみ 2.8	口部内面は尖り、外側は斜め。 つまみは上面がわざわざに造り。	④ヨコナゲ ⑤倒軸ハラケズリ ⑥ヨコナゲ	ヨコナゲ	灰 色 砂粒含む 良 好	天井部に重ね 施設有り。
5	高足器	口 径 11.9 脚 高 5.1 つまみ 3.4	口部内面は尖り、外側は斜め。 つまみは上面がわざわざに造り。	④ヨコナゲ ⑤倒軸ハラケズリ1/2 ⑥ヨコナゲ	ヨコナゲ	青灰色 砂粒含む 良 好	ほぼ完形。 天井部に焼け 痕有り。
6	高足器	口 径 (12.4) 脚 高 4.6	口部内面は尖り、外側は斜めのみをもつ。	④倒軸ハラケズリ2/3 ⑤ヨコナゲ	ヨコナゲ	淡灰色 砂粒含む 良 好	

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色 施 燒	期 土 成	備考
				外 面	内 面			
7	瓦片兼	口 径(12.2) 残 高 3.9	口縁内に瘤状の肉厚な段。 外正側は低く無い。	⑤輪軸ヘラケズリ1/3 ⑥ヨコナゲ	ヨコナゲ	灰 色 砂粒含む 良 好		大井出に量は 燒き度有り。
8	环蓋	口 径(11.6) 残 高 4.1	口縁内に瘤状の肉厚な段。 外正側は低く無い。	⑤輪軸ヘラケズリ ⑥ヨコナゲ	ヨコナゲ	灰 色 砂粒含む 良 好		
9	环兼	口 径(12.4) 残 高 3.4	口縁内に瘤状の肉厚な段。 外正側は低く無い。	⑤輪軸ヘラケズリ ⑥ヨコナゲ	ヨコナゲ	灰 色 砂粒含む 良 好		リと同一器体か
10	环蓋	口 径(11.6) 残 高 2.9	口縁内に瘤状の肉厚な段。 外正側は低く無い。	ヨコナゲ	ヨコナゲ			照片
11	环兼	残 高 2.9	口縁内に瘤状の肉厚な段。 外正側は低く無い。	⑤ヨコナゲ	⑥ヨコナゲ	灰 色 砂粒含む 良 好		
12	系	口 径(10.8) 残 高 8.0 算術径 8.6	口縁内に瘤状の肉厚な段。 外正側は低く無い。	⑤ヨコナゲ 輪軸ヘラケズリ1/2 ⑥ヨコナゲ	⑥ヨコナゲ ヨコナゲ	灰 色 砂粒含む 良 好		
13	剪刀	口 径 (9.6) 手頭高 4.5 残 高 3.9	口縁内に瘤状の肉厚な段。 外正側は低く無い。	⑤ヨコナゲ 輪軸ヘラケズリ1/2 ⑥ヨコナゲ	⑤ヨコナゲ ヨコナゲ	灰 色 砂粒含む 良 好		
14	环	口 径(10.6) 受部径(13.6) 残 高 4.6	口縁内に瘤状の肉厚な段。 外正側は低く無い。	⑤ヨコナゲ 輪軸ヘラケズリ1/2	ヨコナゲ	灰 色 砂粒含む 良 好		
15	剪刀	残 高 3.6	3方向に透かし有り。	⑤輪軸ヘラケズリ ⑥ヨコナゲ	⑥ヨコナゲ ヨコナゲ	灰 色 砂粒含む 良 好		
16	剪刀	残 高 4.1	3方向に透かし有り。	⑤輪軸ヘラケズリ ⑥ヨコナゲ	⑤ヨコナゲ ヨコナゲ	灰 色 砂粒含む 良 好		
17	剪刀	残 高 4.0	3方向に透かし有り。	⑤輪軸ヘラケズリ ⑥ヨコナゲ	⑤ヨコナゲ ヨコナゲ	灰 色 砂粒含む 良 好		
18	剪刀	算術径(10.1) 残 高 3.7	3方向に透かし有り。脚部は内溝し、 腰は浅い。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	灰 色 砂粒含む 良 好		
19	剪刀	算術径(8.4) 残 高 3.8	3方向に透かし有り。脚部は内溝し、 腰は浅い。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	灰 色 砂粒含む 良 好		
20	剪刀	算術径(8.8) 残 高 2.2	透かし有り。表面は低い段がつく。 脚部は内溝し、腰は深い。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	灰 色 砂粒含む 良 好		照片
21	剪刀	算術径(7.6) 残 高 2.1	透かし有り。輪軸は凹溝し、腰はや やえみをもつ。底面に周溝がある。 肩部は膨大腹をもつ。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	灰 色 砂粒含む 良 好		
22	器	算術径(12.6) 残 高 3.2	縫衝き凹縫と波状波を造らす。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	黒灰色 砂粒含む 良 好		
23	器	残 高 4.4	口縁内に瘤状の肉厚な段。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	灰 色 砂粒含む 良 好		照片
24	器	口 径(11.6)	外面に断面三尖の突起を有す。	ヨコナゲ	ヨコナゲ	青灰色 砂粒多く含む 良 好		

表3 石室出土鉄錆計測値一覧

()は現存値 単位はcm

番号	種類	全長	身部長	身部幅	蓋被部長	某部長	逆刺長	重量	備考
25	両刃片逆刺	17.0	2.4	1.5	11.5	2.9	2.4	13.3	
26	両刃片逆刺	(13.7)	2.3	1.4	8.3	(3.1)	2.5	10.3	
27	両刃片逆刺	(4.7)	2.4	1.5	(2.3)	欠損	2.5	4.5	被覆以下欠損
28	両刃片逆刺	(5.5)	2.2	1.4	(3.2)	欠損	2.6	4.5	被覆以下欠損
29	両刃片逆刺	(14.1)	1.9	1.0	9.7	(2.5)	(1.5)	10.1	
30	両刃片逆刺	15.0	1.9	1.0	10.0	2.9	(1.6)	9.5	
31	両刃片逆刺	(13.4)	1.7	0.9	9.5	(2.2)	2.2	10.2	
32	両刃片逆刺	(12.5)	1.8	1.0	9.5	(1.2)	2.4	7.5	
33	両刃片逆刺	(12.8)	2.0	0.9	10.8	欠損	(2.1)	11.0	
34	片逆刺	(12.5)	欠損	欠損	12.5	(不明)	(1.0)	6.7	身部欠損
35	両刃片逆刺	(7.1)	(1.6)	0.9	(5.5)	欠損	(1.6)	4.3	笠被部以下欠損
36	両刃片逆刺	(6.1)	1.8	(1.0)	(4.3)	欠損	(2.1)	3.7	笠被部以下欠損
37	両刃片逆刺	(6.3)	2.0	1.0	(4.2)	欠損	(1.9)	3.7	笠被部以下欠損
38	不明	(5.2)	欠損	欠損	欠損	(3.2)	欠損	1.3	墨詰のみ
39	両刃片逆刺	(3.9)	欠損	欠損	欠損	(3.9)	欠損	1.0	墨詰のみ
40	不明	(1.0)	欠損	欠損	欠損	(3.0)	欠損	0.7	墨詰のみ
a	不明	(12.1)	欠損	欠損	(6.4)	(2.7)	欠損	10.6	2個体共 aは身部欠損
b	両刃片逆刺	(14.6)	(2.0)	(1.0)	9.7	(2.9)	(1.8)		
a	両刃片逆刺	(8.1)	1.9	0.9	(6.2)	欠損	2.4	13.3	2個体共 bは身部欠損
b	不明	(10.6)	欠損	欠損	(7.0)	(3.6)	欠損		
a	不明	(3.3)	欠損	欠損	(3.3)	欠損	欠損	15.0	3個体共 a, cは笠被部のみ
b	両刃片逆刺	(13.5)	(2.2)	(0.9)	(11.3)	欠損	2.3		
c	不明	(3.0)	欠損	欠損	(3.0)	欠損	欠損		

IV まとめ

1. 古墳の年代

桧山峠7号墳の年代を決定するにあたっては、推定くびれ部出土の須恵器の一群と、主体部壇乱坑出土の須恵器・土師器が有効な材料となる。前者の出土状況は破碎された状況ではあるが、地山直上で、その一部のものは盛土にパックされた状態での出土であり、原位置を大きくは損なっていないものと判断され、この古墳に伴うものであることは確実である。後者は壇乱中の出土とはいえ、その出土位置、さらに特に須恵器壺の型式学的な見地からいっても前者と大きな齟齬をきたすようなものではない。そこで、これらの須恵器を検討すると、壺・高壺の蓋においては口径11.4cmから12.4cm、天井部と口縁部の境にさほど突出しない稜を有し、口端部は内側に傾斜した中窪みの面を持つ。身は9.6から10.8cmの口径で、高壺はすべて三方透かしの短脚である。蓋・身とともに天井部や底部の回転ヘラ削りはそれぞれの部位の2/3程度の範囲に施される。これらの特徴から判断すると、出土須恵器は田辺編年のTK-47型式の範疇に属するものであり、5世紀後半～末の年代を与えることができよう。

2. 道後平野における同年代の古墳との比較

ここで道後平野での同年代（TK-23～TK-47）の古墳を拾つてみると、東野町東野お茶屋台古墳群の数基の円墳、石風呂町鶴が崎古墳群中の円墳L区1～3号墳、船ヶ谷町三ツ石古墳、同町にあって前方後円墳の可能性が指摘されている向山古墳（全長不詳、後円部直径26m、くびれ部幅12m）、畠寺町竹ヶ谷古墳群などがあげられる。しかしながら、これらの古墳はいずれもが削平され、主体部の構造がほとんど知られていない。このうち、東野お茶屋台3号墳は2.8m×1.5mの墓壙中央部にさらに2.2m×0.8mの掘り込みを持つ二段墓壙を持ち、墓壙底には継敷きがあったと報告され、箱式石棺あるいは土塙墓を推定されているが、組み合わせ式木棺、また仮に結土床のようなものがあったとすれば短小な削り抜き式木棺の可能性もある。そのほか、ある程度主体部が残存している例として、東石井町東山古墳群中の9号墳が挙げられる。周溝を持つ直径10～12mの円墳で、周溝内より多数の遺物を出土している。隣接する複数の古墳の遺物と混淆状態であるが、この古墳に伴うものはTK-23～TK-47段階の須恵器群や非陶邑系須恵器の高壺や壺であると考えられる。主体部は基底石の一部を残すのみであったが、幅0.7～0.8m、長さは1.7m分が遺存している。盛上と墓壙掘り方との関係は明確ではないが、地山より0.3～0.4m上方の盛上を床面としており、少なくとも盛土中に主体部が構築されていることがわかる。



写真7 東山9号墳主体部

上記のはか、未報告の比較的良好な堅穴式石室の例として鶴が峰古墳群J区1号墳がある。残念ながら確たる年代は不詳であるが、同丘陵上の数基の円墳（周溝のみ遺存）がこの時期に属しており、当墳も同時期の円墳である可能性が高い。天井、北小口様のすべて、また東側壁の一部を失っているが基底石の抜き取り痕が確認されている。規模は、長さ2.4m、幅0.7m、高さ0.65mで前幕遺物は刀子1点のみで、松山岬7号墳と同様、小口壁直近の位置で長軸に直交して置かれていた。床面には棺台と考えられる厚さ10cm以下の扁平な河原石が長さ2mの範囲の石室幅一杯（現況で4箇所、計6個）に配置されており、鉄釘が1点出土している。のことから、埋葬棺として釘使用の組み合わせ式木棺が用いられていたものと考えられる。ちなみに道後平野の例ではないが、このような堅穴式石室と棺台石の組み合わせは、新居浜市金子の金子山古墳や北条市上難波の上難波南10号墳などにみられている。この1号墳の構築は地山をある程度整形した後、盛土によって主体部周辺に平坦面を造成し、この面上に封土の積み上げと同時に石室を構築している。

以上、さほど良好な例は少ないが、道後平野における比較資料を挙げた。まず、墳形には円形と前方後円形があり、円墳にはすべて周溝が伴う。前方後円墳の船ヶ谷町向山古墳には周溝がなく、この点で同じく前方後円墳と判断した当墳と共にしている。墳丘に埴輪を伴わないので東石井町東山9号墳と当墳のみで、その他には伴っている。このうち、石風呂町鶴が峰J区1~3号墳、向山古墳は形象埴輪を含んでいる。主体部の構造がわかっているもののうち、詳細が曖昧な東野町東野お茶屋台3号墳を除けば、当墳を含めた3例が堅穴式石室である。石室規模のうち3基すべてでわかっているのはその幅で0.7m~0.8mと近似した値を示している。当墳の長さは2.1m超ということしかわかっていないが、鶴が峰J区1号墳の長さ2.4mや先述の金子山古墳の2.83m、上難波南10号墳の2.35mを参考にすれば、3m以内の2.5mを前後する規模になるのではないかと推測する。石室は道後平野の3基ともに地山を掘り込んだ墓道に構築されるのではなく、盛土内に構築されることで共通しているが、当墳のように盛土を掘削した墓壌内に築造されるパターンと、鶴が峰J区1号墳のように墳丘の積み上げと同時に築造されるパターンのふたつの構築法があることがわかる。

棺については現在のところ、鶴が峰J区1号墳の釘使用組み合わせ式木棺の例しかわかつていない。当墳の石室床面はフランクトで、棺台のような施設も木棺痕跡や鉄釘も検出されていない。のことから、棺を用いない埋葬も推定できるが、近年の調査で6世紀中~後半の例ではあるが、横穴式石室内での鉄製緊結具不使用の組み合わせ

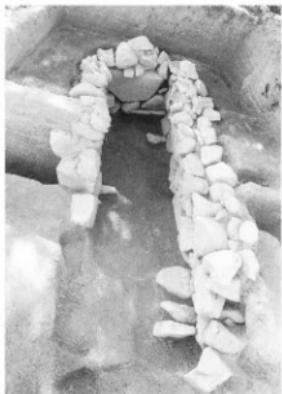


写真8 鶴が峰J区1号墳主体部(1)



写真9 鶴が峰J区1号墳主体部(2)

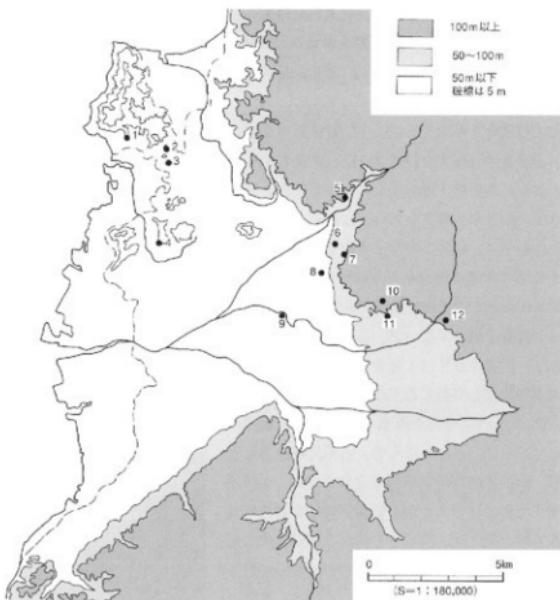


図19 道後平野における5世紀末から6世紀前半代の主要古墳分布

式木棺や板上埋葬の例が知られており、ただちに木棺不使用とばかりはいいきれないところがある。

3. 成果と課題

桧山岬7号墳の存在は、従来の分布調査で確認されてはいたものの、墳形・規模・主体部の構造等は全く把握されていなかったが、今回の調査によって小型の前方後円墳の可能性が高く、竪穴式石室を主体部とする5世紀末に近い時期の古墳であることがわかった。また、部分的な墳丘の遺存状況にもかかわらず、石室と墓廻・墳丘との関係が明確に把握できたのは大きな成果といえよう。

また、本調査によって、道後平野における古墳の主体部への横穴式石室の採用が5世紀末段階では遅らない可能性が高くなかった。MT-15の斎院茶臼山古墳、溝辺1号墳や三島神社古墳にみられるように、6世紀初頭～前半段階には確実に横穴式石室が採用されており、横穴式石室の導入時期が本

調査によってさらに細かくしほられる結果となったことも評価されてよい。

このような意義は意義として、残された課題もいくつかある。まず、この古墳が前方後円墳であるとするならば、ある程度の首長クラスの墓であることは間違いかろう。しかしながら、その規模・陪葬品からすると、例えば三島神社古墳や観音山古墳のような出した首長クラスのものではない。現在、伊予市域まで含む道後平野で、5～6世紀の前方後円墳として認定されている古墳は10基あまりあり、そのすべてが盟主的な首長の墓とされる。前方後円形という墳形が、木古墳のようなクラスの墓にまで採用されているとするならば、未確認の中の前方後円墳が少なからず存在しているものと考えられ、前方後円形という墳形の持つ意味については多元的な評価や解釈が求められることになってこよう。

また、道後平野では6世紀後半まで埴輪を持つ古墳が存在するが、この時期のこのクラスの墓として埴輪を持たないことも注目される。この意味については、現段階ではあきらかにし難いが、東方2.5kmの6世紀中葉の前方後円墳（全長50m超）、葉佐池古墳も同様に埴輪を持っておらず、埴輪による祭祀の有無が必ずしも被葬者の階層性を反映するものではないとするならば、このことには小地域内での地域性、あるいは被葬者の出自といったことにつかわる何らかの意味があるのかもしれない。今後の周辺地域での類例を待ちたい。

[文献]

- 田辺晴二 『陶邑古窯跡群Ⅰ』 平安学園 1966
『須恵器大成』 角川書店 1981
- 森 光晴 『東野お茶屋古墳群』『愛媛県史 資料編 考古』 1986
『溝辺遺跡埋蔵文化財調査報告書』 愛媛県教育委員会 1979
『三島神社古墳』 松山市教育委員会 1972
- 西尾幸則 『鶴が峰古墳群』『愛媛県史 資料編 考古』 1986
『畠寺竹ヶ谷古墳群』『愛媛県史 資料編 考古』 1986
『齊院茶臼山古墳』 松山市教育委員会 1983
- 梅木謙・ほか 『船ヶ谷三ツ石古墳』『和氣・堀江の遺跡』 松山市教育委員会・（財）松山市埋蔵文化財センター 1993
- 池田學・宮崎泰好 『船ヶ谷向山古墳』『松山市埋蔵文化財調査午報Ⅱ』 松山市教育委員会 1989
- 松岡文一 『伊予金子山古墳』『古代学研究17』 古代学研究会 1957
- 坂本安光 『北条市上灘波古墳群調査報告書』 愛媛県教育委員会 1982
- 相田則夫 『4・5世紀の伊予の首長墓』『社会科学研究 第1号』 1980
- 栗田茂敏 『愛媛の横穴式石室』『四国における横穴式石室の成立と展開（シンポジウム資料）』古代学協会四国支部 1995
- 『愛媛県松山市 葉佐池古墳 一本槍が残された横穴式石室の調査』 松山市教育委員会 1994

写 真 図 版



調査前全景（南東より）



カットされた塙丘の現況（西より）



填丘カット面の精査状況（1）（南東より）



填丘カット面の精査状況（2）（西より）



主体部上面石材露出状況（北より）



主体部捜乱坑の検出（東より）



主体部攢乱坑掘削状況（東より）



主体部攢乱坑器出土状況（北より）



墳丘須患器出土狀況（1）



墳丘須患器出土狀況（2）



竪穴式石室の検出（北東より）



石室小口壁部遺物出土状況（1）（南東より）



石室小口壁部遺物出土状況（2）（南東より）



刀子の出土状況



後円部墳丘と石室（南西より）



石室完掘状況（1）（南より）



石室完掘状況（2）（南東より）



石室完掘状況（3）（北西より）



小口壁部墓壙断面（北東より）



側壁部墓壙断面（南より）



完掘された墳丘全景（1）（西より）



完掘された墳丘全景（2）（東より）



1



3



4



5



6



7

13

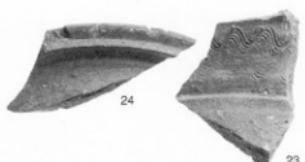


12



2

填丘出土遺物（1）



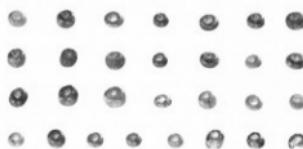
24



23



22



墳丘出土遺物（2）

石室出土ガラス小玉



46

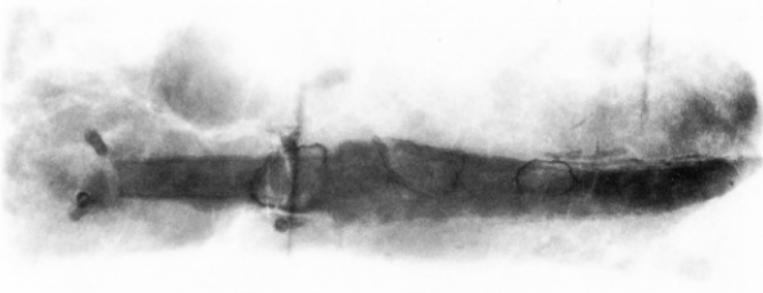


44

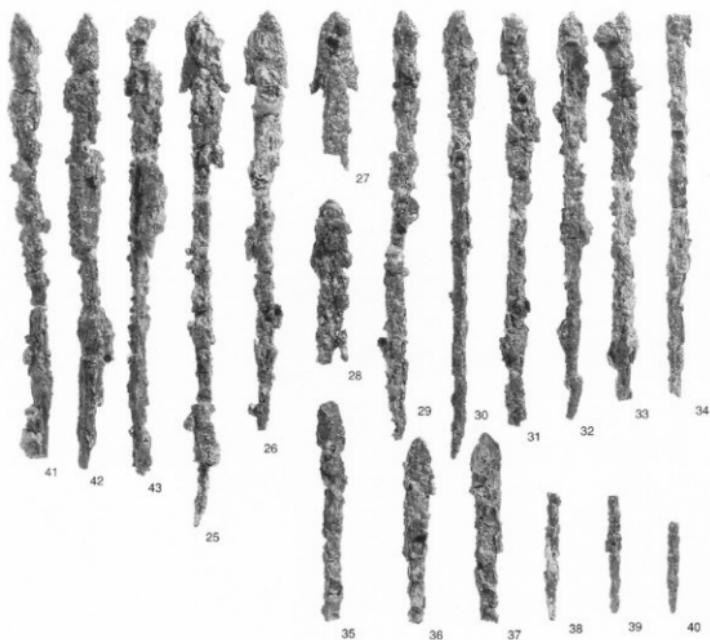
石室出土砾石・馬具



石室出土刀子



刀子 X 線写真



石室出土鐵錐



76

填丘採集石錐

報告書抄録

ふりがな	ひやまとうげななごうふん						
書名	松山岬7号墳						
副書名							
巻次							
シリーズ名	松山市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第61集						
編著者名	栗田茂敏						
編集機関	財団法人 松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター						
所在地	〒791 松山市南院町乙67-6 TEL089-923 6363						
発行年月日	西暦 1997年 9月 1日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北緯 度	東經 度	調査期間	調査面積(㎡)	調査原因
		市町村 遺跡番号					
ひやまとうげ 松山岬7号 墳	えひめけんまつやまし 愛媛県松山市 ひらいまち 平井町	38201	33° 49' 01"	132' 49' 28"	19950222~ 19950609	282.33	電力鉄塔建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 潜	主 な 遺 物	特 記 事 項		
松山岬7号墳	古 墳	古 墓	前方後円墳 堅穴式石室	須恵器、土師器 鐵劍、馬具 刀子、砥石 ガラス小玉	全長不明 後円部直径16~17m 5世紀末		

松山市文化財調査報告書 第61集

桧山峠7号墳

平成9年9月1日 発行

編集 松山市教育委員会

発行 〒790 松山市三番町6丁目7-11
TEL(089)948-6605

財団法人 松山市生涯学習振興財團

埋蔵文化財センター

〒791 松山市南薰院町乙67番地6
TEL(089)923-6363

印刷 原 印 刷 株 式 会 社

〒791 松山市山越4丁目8-15
TEL(089)924-8823